「訳制動画片」と「小人書」

――1980 年代日本アニメ・マンガの中国における伝播についての考察

陳襲／Chen, Yan

所属：東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学博士課程

「動漫」という言葉は中国で頻繁に用いられているものの、未だに明白な定義が存在しない。「『動漫』は『動画』（アニメ）と『漫画』の総称」[1]、「『動漫』はアニメのこと」[2]、「『動漫』は『動画からの漫画』」[3]など様々な説と観点があり、辞書でもそれぞれが異なる解釈を示している。近年では 1990 年代以後の大陸における『動漫時代』など、日本アニメ・マンガ情報誌の出現に関連付ける形で「動漫」の「仕組み」が説明されているが、本研究は日本「動漫」が初めて中国に上陸した 1980 年代にフォーカスし、『龍の子太郎』、『鉄腕アトム』などのアニメの上映と日本マンガの「小人書」バージョンの実態を考査する。またその結果に基づき、中国における「動漫」の出現の実態、および「動」が「漫」の前に先行する理由を提示する。

「訳制動画片」の繁栄――80 年代の「海外コンテンツブーム」

1949 年以来続いた中国独特の社会主義の歴史とその制約のため、中国の一般民衆が大量の海外コンテンツに接触できた時期は 1950 年代と 1978 年以降に大きく分けられる。50 年代はソ連映画（アニメも含む）が中心だったが、1956 年には「日本電影周」（日本映画週間）が 10 都市で行われて大きな話題になった。60 年代冒頭以降は中ソ関係が崩壊してソ連映画の上映が中止され、同時期から文化大革命期までの間は、海外映画は「内部上映」という唯一のルートを通じ、中国のごく一部の「内部人士」によって鑑賞されていた。文革が終焉を迎え、1978 年末に行われた中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議以後、文革中に「打倒された」作品および海外の様々なコンテンツが解禁される中で、1978 年 8 月に日中平和友好条約が締結され鄧小平が訪日した後、「新中国」は膨大な日本のコンテンツ群を迎えることとなった。

このような流れの中で、日本のアニメは最初は映画と共に登場した。「日本電影周」が復活し、1979 年 9 月の第二回「日本電影周」では東映動画のアニメ映画『龍の子太郎』（中国語訳名：『龍子太郎』）が上映され、1979 年 11 月 29 日に中国中央テレビ局においても初放送された。同映画はその後 90 年代前半まで繰り返し再放送され、幅広い観客に強い印象を与えた。また日本人形アニメ『一寸法師』など短編アニメも、1979 年にテレビで放送されていた（日本以外のアニメも含む）[4]。

当時、アニメは子ども向けであることから字幕ではなく吹替が必要となり、この時期以降、吹替されたアニメは「訳制動画片」と呼ばれるようになった。中国国産アニメの声優の選抜と異なり、原版アニメに近い声を真似するのを専門とし、翻訳されたセリフを調整しながら原版の口付に合わせることなどに「特化した」専門の「訳制組」（吹替チーム）が成立された。当時の海外アニメの大成功は「訳制組」の努力を抜きにしては語ることができない。

1980 年 12 月 7 日 19 時 30 分、1963 年に作られたモノクロの『鉄腕アトム』が、在日華僑が経営する向陽社によって日本企業の CM パッケージとして中国中央テレビ局（全国ネット）にて放送され、これが中国最初のテレビアニメ専用枠――「中央テレビ局日曜夜テレビアニメ枠」の開設に繋がった。ゴールデンタイムに放送された『鉄腕アトム』は膨大な人気を獲得し、アトムも原作者である手塚治虫も日中友好の象徴となり、現在に至るまで日中アニメ文化交流を語る際に不可欠な要素として認識されている。

その後、様々な海外アニメ（日本アニメがメイン）がこの枠で放送され、80 年代後半からは広東・北京・上海のテレビ局を中心とした地方テレビ局でも海外アニメを自主輸入しはじめ、「訳制動画片」が大ブームとなった。

アニメの「小人書」版の流行――前後する海外コンテンツの輸入

1940 年代から、中国では絵師を雇って映画を「連環画化」し、映画上映とほぼ同時に販売する出版業界の「伝統」があった[5]。その後、利益目当てで京劇、舞台劇、アニメなどあらゆる人気コンテンツを「連環画化」することが 1980 年代まで行われた。そして日本アニメの場合、大部分が人気マンガがアニメ化されたものであるため改めて絵師を雇う必要がなく、原作マンガを翻訳して「連環画風」に編集すれば完成だった。その結果『鉄腕アトム』をはじめとして、日本アニメの原作マンガの「連環画」版（手のひらサイズであるため「小人書」と呼ばれる）が大流行した。

こうして、日本の「マンガ→アニメ」とは真逆である「アニメ→マンガ」という「動」が「漫」の先にある「構造」が出来上がった。

---

[1] 遠藤誉、『中国動漫新人類――日本のアニメと漫画が中国を動かす』、日経 BP 社、2008。

[2] 古市雅子、「中国で『動漫』になった日本アニメ：日本ポップカルチャーの受容から世界競争時代へ（特集 パブリック・ディプロマシーの最前線）」、『外交 = Diplomacy 51』, 30-37, 2018-09

[3] 『香港漫畫圖鑑 1867―1997』、非凡出版、香港、2017。27 頁。

[4] 趙豊（関中阿福）、羅星海、『童話往事』第 1 巻、『中国訳製動画片 1979-1987』（中国北京、中国伝媒大学出版社、2017）、5 頁。

[5] 武田雅哉、『中国のマンガ ＜連環画＞の世界』（平凡社、2017）79 頁。